

革命期を生き抜いた植民地期原住民行政官吏 (パンレ・プラジャ)

——インドネシア・西ジャワ州の場合——

岡 本 正 明*

The Colonial Aristocratic Bureaucrats (Pangreh Praja) Surviving the Revolution: The Case of West Java, Indonesia

Masaaki OKAMOTO*

The revolution that broke out in 1945 was not a complete turning point in the history of Indonesia, because the colonial indigenous bureaucrats and the colonial bureaucracy as a system survived the revolution and continued into the nation-state era. Why did this happen? This paper looks in particular at the indigenous bureaucrats, tracing their actions and behavior during and just after the revolutionary period (1945–1950) in West Java.

During the colonial period, the West Javanese aristocratic class was coopted as colonial administrative bureaucrats, called Pangreh Praja (ruler of the realm), and had influence over the indigenous people.

When the Republic of Indonesia (RI) declared its independence in August 1945, after the Japanese occupation, Pangreh Praja soon pledged their loyalty to the new nation-state and nearly became the republic bureaucrats with the central government's willing acceptance. It failed, however, for two reasons: the social revolution and the return of the Dutch. The social revolution swept through West Java, and in some parts of the region the top local Pangreh Praja were ousted and forced to flee. The central government of RI tried to reestablish the old order by installing other Pangreh Praja. This attempt failed because of the Dutch occupation of West Java. There the Dutch attempted to build a puppet state called Negara Pasundan. They recruited ex-colonial bureaucrats into the state apparatus, and many Pangreh Praja joined the state, even though they had formerly been RI employees.

Negara Pasundan, however, was not recognized as a state by the Sundanese and in a few years it was disbanded and included into the RI. This brought about a crisis for the Pangreh Praja of Negara Pasundan. They were labeled as “cooperators” (Co) by the loyal RI supporters (Non). They were on the verge of being fired. But the upper echelon fared well. Why?

First, they were useful human resources in the new nation-state. They were highly educated and had the knowledge and experiences to administer the state. Second, they had a close family network. The network encompassed both Negara Pasundan and RI, and attenuated the sharp attack against those on the Co side.

* 京都大学東南アジア研究センター；Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

I インドネシア史における連続性

インドネシア史上、1945年から1950年までの五年間は国民革命期、(旧宗主国オランダからの)独立闘争の時代と位置づけられている。どちらの言葉でこの時期を定義するにせよ、社会の急速な変容が含意されていることは間違いない。そのためかこの時代のインドネシア国内政治を扱う研究は、この時代ゆえに政治的主体となりえた青年(プムダ)や無法者を扱ったものが多い[例えば Anderson 1972; Kahin 1985; Cribb 1991 参照]。インドネシアのこの時代だけに焦点を絞るのならばそれでも良い。しかし、植民地国家(蘭領東インド)→革命・独立闘争→国民国家(インドネシア共和国)という少し長い時間軸の中に革命・独立闘争期を位置づけ、この時期の社会的混乱が植民地国家(蘭領東インド)の社会構造にいかなる影響を与え変容をもたらしたのかを考えようとすれば、従来とは別の主体に焦点を当ててこの時期を見直す必要があろう。

注目したいのは、植民地期の原住民トップ・エリートであった原住民行政官(パンレ・ブラジャ, Pangreh Praja)である。彼らが革命期を生き抜いたとすれば社会構造に連続性が見られたといえるであろう。これまでの研究でもパンレ・ブラジャは制度として、或いは人材として革命期、そしてその後、社会的・政治的に重要であり続けたとの指摘はなされている[Anderson 1972; Smail 1964; Lev 1966]。だが、それらは実証性を欠く、いささか印象論的な指摘に止まり、1945年から50年までのパンレ・ブラジャに焦点を当てた研究はあまり見受けられないし、彼らが生き残った理由を説明したものは皆無である。本稿は植民地末期に西ジャワ内の原住民行政官であったものに専ら焦点を当て、彼らが「オランダ対インドネシア」という二項対立の狭間を生き抜いたこと及びその理由を示したい。

西ジャワを取り上げる理由は、首都ジャカルタを囲む地理的要地である上(図1参照)、プランテーションからの経済的利益も大きく、各勢力にとって垂涎の的であったことから、革命期の荒波に最も襲われやすかった地域の一つといえるからである。蘭領東インドの再植民地化を目論むオランダが、最初にジャカルターボゴール―バンドンという西ジャワ中心部を確保したことからもこの地域の重要性は分かる。

本論に入る前に植民地末期の西ジャワを概略しておきたい。西ジャワは、1930年代には5理事州18県からなっていた(図2参照)。人口の大多数は蘭領東インドの中で二番目の人口を誇り、ムスリムが圧倒的なスダ人であるが、ジャワ海に面する北岸地域にはジャワ人も多く住んでいた。大きく分けると、西にバンテン地域、東にチレボン地域、南にプリアンガン地域、そしてその三地区に囲まれるようにボゴール、ジャカルタ周辺地域ということになる。西ジャワ州の中心は州都バンドンのあるプリアンガン地区である。

では、この西ジャワで原住民貴族がどのように展開・変容していったのかを見ていこう。

岡本：革命期を生き抜いた植民地期原住民行政官吏（パンレ・プラジャ）

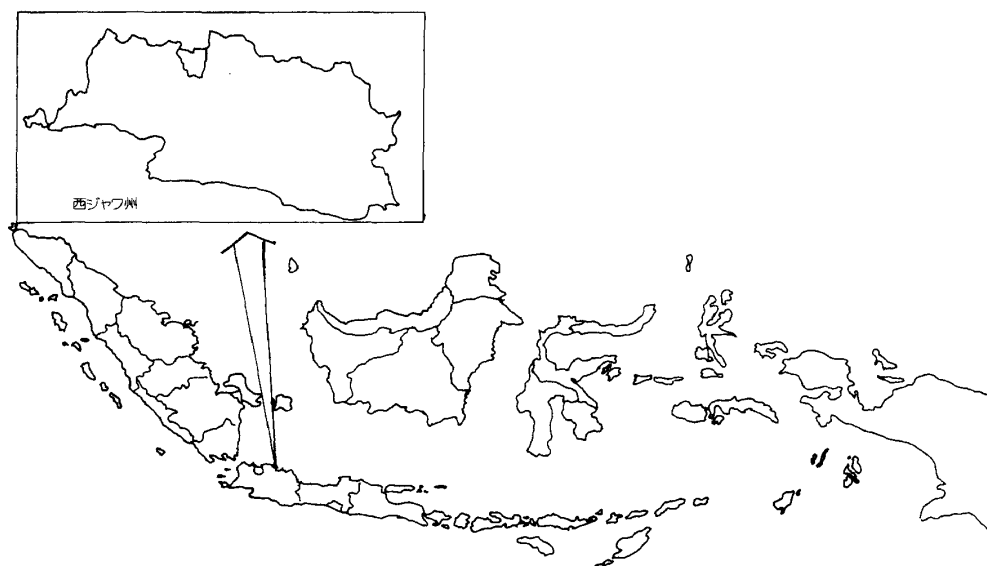


図1 インドネシアの中の西ジャワ州

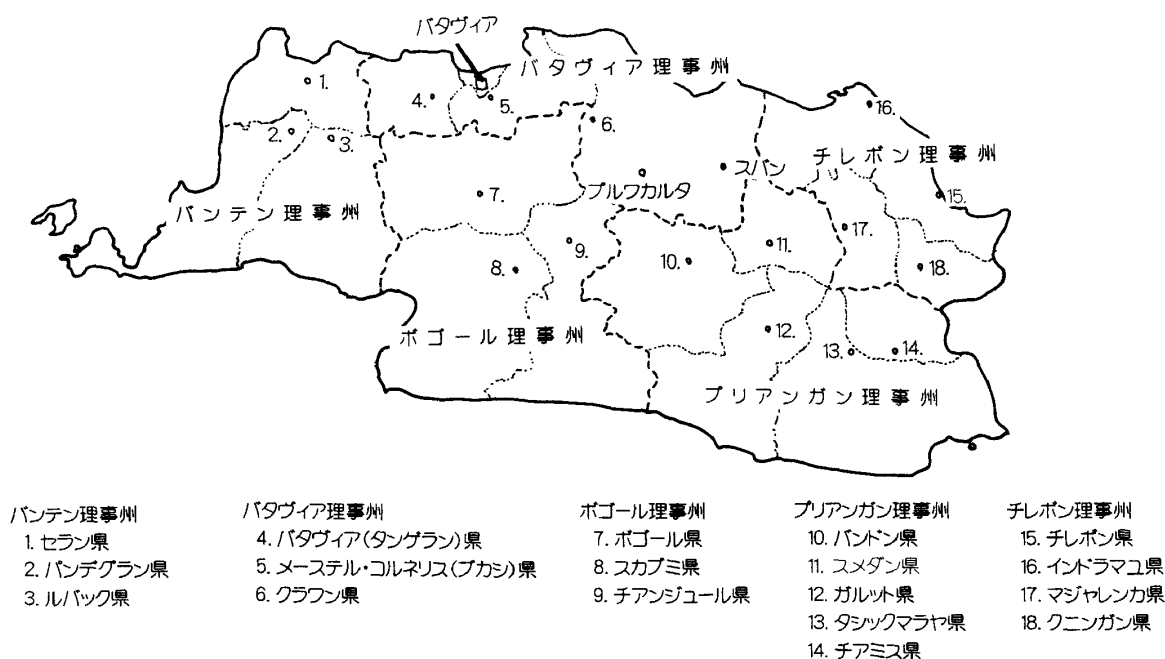


図2 1930年代の西ジャワ州の地図

II 1945年までの原住民貴族たち

1. 官吏化する原住民貴族

17世紀、オランダは蘭領東インド（現インドネシア）に植民地支配の第一歩を踏み出した。以後、オランダは植民地支配を面的にも質的にも拡大していき、20世紀に入ると現インドネシア

の全領域を支配するようになる。統治に当たってオランダが利用したのは、マタラム王国、パジャジャラン王国、チレボン王国、バンテン王国といった（旧）王国の王を祖先とする貴族たちである。彼ら貴族たちが県長（ブパティ）以下のポストを占めていき、更に彼らは高貴な血（darah biru）と地位を守るために結婚を通じて姻戚関係に入っていた。¹⁾ その結果生まれた貴族の血縁ネットワークは、一般住民とは別の社会階層としての貴族層を固定化して社会的流動性を抑制していくことになる。

植民地支配が領域支配の形を取り始めると、その効率的管理・収奪のために官僚制の整備が不可欠となる。オランダ人だけで官吏を充填するとなれば、きわめてコスト高の官僚制となることから、原住民に近代的統治の方法を教育して官吏に登用する必要性が生じてくる。その供給源は貴族であった。まず1879年、ジャワ島の三都市（バンドン、マグラ、プロボリンゴ）に首長学校（Hoofdenschool）を作り、県長（ブパティ）の子弟を受け入れた [Sutherland 1973b: 87; Koesoemasoebrata [1929]: 100-108; Moehamad Hasan [1929]: 142-148]。バンドンにあった首長学校が、プリアンガン地方の貴族の呼称であるメナック（menak）を形容詞にして「メナックの学校（Sakola Menak）」と呼ばれていたのは、この学校の貴族中心的性格をよく表している。

当初のカリキュラムは教員養成学校のそれと同じで官吏養成用とは言い難かった。20世紀に入るとこの学校は教育期間の延長（3年制から5年制、7年制へ）、法学などの導入により官吏養成学校の色彩を強め、名称も原住民官吏養成学校（Opleiding School voor Inlandsche Ambtenaren, OSVIA）となった。OSVIAの授業料は高く、低所得者層には入学困難であった。しかも入学者はバンドン校で毎年15～26名（1915～27年）でしかなかった。²⁾ この狭い門戸をくぐり抜けるにはオランダ人官吏とブパティの入学推薦が必要であった。従って、入学においては、彼らとコネを持つブパティの親族が有利であった。これは、社会階層に基づく基準を入学段階で導入していることを意味し、実際のところ入学者は下級メナック以上の子弟が大半であった [Sutherland 1973b: 200-202]。スカブミ県長の息子で、1930年代後半に OSVIA の後身 MOSVIA に入学した RGM・スリアダヌニングラット（RGM. Suriadanuningrat）によれば、入学者の95%がメナックの子孫であった。³⁾

一方、ブパティの候補となる資格としてオランダ政庁は1913年に次のことを定めていた。
①最低でも原住民官吏養成学校を卒業していること（上のランクの学校で、主にオランダ人子弟向けの上級市民学校（HBS）が存在したが、原住民はブパティの子弟であっても入学は容易ではなかった）、②オランダ語に堪能であること、③正直・有能・（オランダに）忠実であるこ

1) その具体的様子については、セラン県県長の自伝に記述がある [Djajadiningrat 1937]。

2) MOSVIA 年譜より算出 [Gedenboek MOSVIA [1929]]。

3) スリアダヌニングラットとのインタビュー、1998年8月25日。

と、④ブパティの出自であること、の4つの条件である。また、行政官への就任に際しては、「今でもまだ力を持つ王達、現在のブパティ、或いは有力な貴族と」親族関係があることを示す血統書 (stamboek)、そしてブパティが認証済みの家系図が必要であった [Nina 1998: 78-79, 149]。従って、原住民行政官制の階梯を上がろうと思えば、血筋の良さが常に重要な要素であった。

オランダ植民地最末期の1942年頃には原住民行政官トップのほとんどを OSVIA（或いは HBS）卒業生が占めるという状況であった。西ジャワでは、18人のブパティのうち17人が確実に OSVIA・HBS 出身者（約94.4%）、18人の副県長全てが OSVIA・MOSVIA の出身者（100%）、105の郡長（Wedana）ポストのうち100のポストが確実に OSVIA・MOSVIA 出身者（中退一人を含む）（約95.2%）で占められていた。そしてその大半がラデン（Raden, 以下 R）やマス（Mas）といった貴族の称号を冠していた。⁴⁾ 植民地末期には、官吏としての訓練を受けた貴族が内務行政を牛耳る段階に到達していたといえる。

以上のことが意味するのは、植民地国家の屋台骨ともいえる内務行政機構は実務能力だけが行政官の就任・昇進を決定するような実務的なマシーンではなく、良い血筋という権威が常に基準として存在するシステムであったということである。こうしたシステムは、原住民側が近代官僚制を換骨奪胎した結果というよりも、オランダ側が試行錯誤しながら継続した植民地国家経営の方策の結果であった。最終的な権力・暴力が宗主国オランダにあれば、通常はブパティを頂点とするメナック達の伝統的権威に原住民馴致を委ねておけば事足りた。西ジャワを含むジャワ島の直轄領において、原住民内務行政官が一括して「領域の支配者（パンレ・プラジャ）」と呼ばれたのは、支配権がオランダに最終的に託されていた事実をふまえれば皮肉な名称であったが、住民の側からすれば妥当な名称であったといえる。

2. 原住民貴族たちにとってのパンレ・プラジャの道

ここでは、なぜ貴族層が行政官を目指したかについて触れる。彼らにとって魅力がなければ、貴族優位のパンレ・プラジャ制度は存続し得なかったはずである。

原住民社会の中で植民地官吏であること、ましてやパンレ・プラジャであることは最高の榮譽であった。従って、既に自らがパンレ・プラジャであれば、その子弟を OSVIA に送り込んでパンレ・プラジャへの道を歩ませることで社会的地位の再生産を企てようとするのは当然であった。また、パンレ・プラジャではない貴族の血筋の者が子弟をパンレ・プラジャに仕立てて立身出世させようと考えても不思議はなかった。例えば、後に国防相に就任するイワ・クスマ・スマントリ（Iwa Kusuma Sumantri）が1915年 OSVIA に入学していったんはパンレ・プラジャの道を志したのは、ブパティの家柄にありながら、パンレ・プラジャではなく学校長を務める

4) 『統治年鑑1942年版』[*Regeerings* 1942] 及び軍政監部出版『ジャワにおける著名なインドネシア人』[*Gunseikanbu* 1944] などから作成。

父親の希望を入れてのことであった [イワ 1975: 12-13]。

植民地統治も後半になると、官吏だけが出世の道ではなかったことは確かである。20世紀にオランダが始めた倫理政策の効用で大都市には種々の学校があり、その卒業生を受け入れる多様な職種が都市には生まれていた。そして上官やオランダ人官吏の顔色をうかがうことを常とする官吏よりも、医師、弁護士、編集者、技師といった不安定ではあるが比較的自由的な職種につくことを望む者も出てきていた。そのことは、後のパスンダン大学学長ムフタル・アフアンディ (Muchtar Affandi) の自伝からも分かる。彼の希望は高等技術学校 (後のバンドン工科大学) を卒業して技師になることであった。しかし結局、親の意向に沿って MOSVIA に1935年入学したのであった。親が MOSVIA を奨めた理由は、立身出世の問題ではなく金銭的なものであった [Muchtar Affandi 1997: 82]。金銭的理由とあるだけでそれ以上説明はないが、弟妹のことを考えて早くパンレ・ブラジャとなって安定した生活をしてもらいたいというのが親の意向であったのだろう。

社会的栄達の道が複数化する時代にあっても貴族達の中にパンレ・ブラジャになることを希望し続ける者がいたのは、やはり官吏が高い社会的地位を占め続けたからであろうし、また、いったんパンレ・ブラジャになれば居心地が良かったからであろう。蘭領東インドは、人民の政治参加というものが基本的に否定された「官僚国家」であり、そこで彼らは原住民との関係においては権力中心たり得たからである。植民地統治後半になると、現職のプパティとは家系の遠い中級・下級貴族もパンレ・ブラジャに参入してきており、旧貴族と新興貴族との間で争いが起きていた [Sutherland 1973b]。しかしこれは、社会階層的に見れば民衆を蚊帳の外においたエリート間の争いでしかなかった。

この貴族中心のパンレ・ブラジャは日本軍が侵攻してくるとどうなったのであろうか。次にその点を見ていこう。

3. 日本軍侵攻と原住民官吏登用の継続

ジャワに侵攻した日本軍は、オランダ時代には抑圧されていたスカルノやハッタなどのインドネシア民族主義者を人民の動員のために利用した。日本軍にとって、短期間で自らへの支持を集める上でナショナリストは都合が良かった。彼らが日本軍を支持する演説を大衆の前やラジオのマイクに向かって行い、大衆動員を図ってくれば良かったからである。こうしてナショナリスト政治家が統治の側に参加するようになった。

行政のあり方も変わった。地方行政では理事州が州と改称され、州長官についた日本人が強大な権限を握ることになった [Walker 1967: 111]。⁵⁾ その一方で日本人行政官不足を補い、現地

5) 1944年末には、ジャワの三州でインドネシア人が州長官に就任した。

人を懐柔するため、インドネシア人が市長職や中央政府の官職といったオランダ時代には到底不可能であったポストにも登用されるようになった。但し、登用される官吏の質がさほど変わったわけではない。西ジャワではタンゲラン県とインドラマユ県で例外的起用がなされたぐらいであった。⁶⁾『治官報』[ジャワ軍政監部 1989]の人事異動欄などを見る限り、ある県長ポストを一族が占め続ける傾向は弱まったが、少なくとも西ジャワ域内については OSVIA・HBS 出身者が殆どのポストを握り続けていた。つまり日本軍は地方行政については基本的に彼らに頼っており、その点ではオランダと変わりなかった。

日本占領期の特徴はパンレ・プラジャとインドネシア民族主義者とが共に統治者の側に立ったことである [Anderson 1972: 65]。その結果、インドネシア民族主義者もまた統治することの意味を理解することができ、独立宣言後にはパンレ・プラジャは味方であるとの発想をすることができたのである。だが、現地民政官が、労務者、兵補、従軍慰安婦といった形で人民を表に立って徴用したため、これまで以上に住民の恨みを買った者も多かったことを付け加えておくべきであろう。

III 社会革命の中のパンレ・プラジャ

1. 日本軍降伏後の地方の混乱

1945年8月15日、日本が連合軍に降伏した。予想以上に早い時期での降伏であったため、中央・地方を問わず正当な権力継承者など定まっておらず、混沌が招来しかねなかった。スカルノやハッタなどが模索した道は、現状維持を委ねられ武装解除していない日本軍との対立を避けることであった。そして暗黙にであれ彼らの支持を取り付けつつ、軍政の行政機構を基本的にそのまま受け継いでインドネシア国家を樹立するという穏健な道であった。一方、日本軍政との協力を拒否してきたシャフリル、或いは彼を支持するスカルニ (Sukarni)、ハエルル・サレ (Chaerul Saleh) などの青年 (プムダ) 達はこうした現状維持路線に反対であり、対日姿勢を明確にした早急な独立を望んだ。封建主義の否定も革命の目的とするシャフリルにすれば、「パンレ・プラジャは、オランダ植民地主義が我々の封建主義の残滓から作り上げた装置でしかなく」、変革が必要ということになる [Sjahrir 1968: 26]。

中央レベルではこの二つが大きな流れであった。独立宣言が8月17日という比較的早い時期に、そしてあまり衆目を引かずにスカルノ宅前で行われたことは、それが二つの流れの妥協であったことを示している。

共和国大統領スカルノや副大統領ハッタは、中央レベル、つまり内閣布陣では日本軍政期の

6) インドラマユ県県長は、結局、OSVIA 卒の官吏に代わった。

部長や参与を起用し、地方レベルではパンレ・プラジャの地位を保証した。パンレ・プラジャもそれを受け入れた。8月19日には、州副長官であったインドネシア人が日本人に代わって州長官になった。植民地期の最大地方行政単位であった州を復活させインドネシアを8州に分けた。そして、ジャワでは州知事ポストに元ジャカルタ州長官スタルジョ・カルトハディクスモ (Sutardjo Kartohadikusumo) (西ジャワ州知事) など有力パンレ・プラジャを就任させた。9月2日には、全ジャワとマドゥラのパンレ・プラジャを集めた会議がスカルノとスタルジョの提案で開催された。そこでスカルノはこう述べる。「インドネシア共和国の政府指導部の政策では、パンレ・プラジャは単に秘書、事務員、或いは職工長だとみなされていると思わないで欲しい。我々はパンレ・プラジャの地位を下げたり、おとしめたりするつもりはない。我々はパンレ・プラジャにはふさわしい地位を与える所存である」[Anderson 1972: 113]。その二日後の9月4日に発表された初代内閣人事で、内務大臣に元バンドン県長ウィラナタクスマが就任したのは、パンレ・プラジャの立場を保証しようとする意図の反映であったのであろう。彼は植民地末期には人民評議会で活躍しており、スタルジョと並んでパンレ・プラジャの代表的人物であった。⁷⁾

国民の統一を重視するスカルノやハッタにすれば、彼らを取り込むことは不可欠であった。反日的な勢力がパンレ・プラジャに取って代われれば、日本軍との激しい戦闘は避けられなかったし、彼らほど近代的行政に関する知識と経験を有するものは他にいなかった。彼らが共和国に忠誠を誓い直し、行政の歯車を回してくれればよかった。パンレ・プラジャの側も異存はなかった。官職にあることで給与を得、権威と権力を引き出してきたのが彼らである。基本的に彼らが保証される以上、インドネシア共和国支持派に回ればよかった。州長官はレジデン (Residen) になり、県長はブパティ (Bupati) になり、市長はワリ・コタ (Wali Kota) になりさえすればよかった。

しかし地方では、上述の中央の意向が反映される政治状況にはなかった。蘭領東インド期、軍政期を通して地方支配の中心であったパンレ・プラジャの権威は低下していた。それは、日本軍政期に彼らが行った統治に対する民衆の不満のゆえであったり、インドネシア国民委員会地方支部 (Komite Nasional Indonesia Daerah) などの公設組織において彼らが政治家たちと同列に位置する状況になっていたりしたからである。⁸⁾ また、彼らの地位を支える武力もなかった。地域によっては急速な秩序崩壊が生じた。西ジャワの三地域についてこの点を見てみよう。

2. プリアンガン理事州

植民地時代、各県のブパティは世襲的性格が強く、住民の馴致も比較的うまかった。彼らに対立しうるインフォーマル・リーダー、イスラーム指導者キヤイ (kiyai) とは比較的良好な関

7) ニナがウィラナタクスマについての比較的長い紹介を行っている [Nina 1998: 281-289]。

8) スメイルがパンレ・プラジャの地位低下を強調している [Smail 1964]。

係を築いていた。⁹⁾ 革命が始まると、バンドンの名門ウィラナタクスマ家などは、即座に親も子も共和国派になった。親は既述のように内相になったし、タシックマラヤにいた長男マレが共和国側についたほか、アフマド、メメッド、アッパースなどの息子は共和国軍に参加した。また、その他ダエン・コサシ・アルディウィナタ（Daeng Kosasih Ardiwinata）、ソリヒン・GP（Solichin GP.）などの青年メナックも共和国軍であるシリワンギ師団に部隊長として参加した。従って、プリアンガン地区ではそれほどラディカルな権力交替は起きなかった。例えば、バンドン県では250人中10%の村長、27人中12人の副郡長、9人中1～2人の郡長が交替させられたが [Smail 1964: 122]、県長が無理やり交替させられるようなことはなかった。

3. ジャカルタ周辺

ジャカルタ周辺は私有地が卓越しており植民地時代から国家権力の浸透が弱かった。そのため、日本軍降伏後の混乱期にはインフォーマルな地方の首領が権力を掌握した。ジャカルタ州長官スタルジョは、ナショナリストに変貌した地方の無法者たちによって一時抑留された。カラワン地区では日本占領期のインドネシア人部隊である祖国防衛義勇軍（ベタ）が日本軍の武装解除をいったんは成功裡に行った。そして警察及び行政官との間に同盟を組んで秩序構築を図ったが日本軍の反攻に遭い、県長や警察署長は捕まった。その後、ブバル（Boebar）という綽名を持つ無法者がカラワン県庁を占拠し、県長を自称した。タンゲラン県では人民が蜂起して政府の統治機構は崩壊し、その蜂起を率い「人民の父」を自称するキヤイのハジ・アフマド・ハエルン（Hadji Achmad Khaerun）が独立政府を樹立した。県長 R・アグス・パドマヌガラ（R. Agus Padmanegara）（OSVIA 1917年卒）は辞めさせられ、下級官吏選出は人民の投票に委ねられた [Cribb 1991: 50-53; Anderson 1972: 169]。

4. バンテン理事州

バンテン理事州では、理事官、三県（パンデグラ、セラン、ルバック）の県長、各地の郡長に任官していた貴族が辞職した。¹⁰⁾ 彼らに代わったのは、インフォーマル・リーダーのキヤイやジャワラ（jawara）である。彼らは権力奪取の過程で行政官や警察を殺すこともあった。キヤイは、軍政期のイスラーム取り込み政策もあって社会勢力として伸長したイスラーム指導者であり、その教え子として多くのサントリ（santri）を抱えていた。ジャワラとはカリスマ、武術、

9) 例えば、共産主義系運動のサレカット・ラヤット（Sarekat Rakyat）が1920年代半ばに農村部にまで組織化の手を伸ばしたとき、プリアンガンのブパティ達はサレカット・ヘジョ（Sarekat Hejo）などの組織を作って対抗し、サレカット・ラヤットの影響力を削いでいった [Sutherland 1973b: 356-371; Svensson 1980 を参照]。

10) KH・ズフリ（KH. Zufri）（1945年から1947年までのセラン県ポンタン郡郡長）とのインタビュー、1999年11月26日。

魔術で部下を集めるバンテンの無法者であった。共に反パンレ・プラジャという点では一致していた。パンレ・プラジャはバンテン出身者ではなくプリアンガンの出身者が占めており、バンテンはプリアンガンに支配されているとの意識も彼らにはあったようである [Williams 1985: 56, 74]。彼らの蜂起により理事官の R・Tg・ティルトスヤトゥナ (R. Tg. Tirtasujatna) (OSVIA 1914年卒) はボゴールに逃亡した。彼に代わってセランのペタ大団長であったキヤイが集会により理事官に選ばれた。セラン県ではジャワラが蜂起してセランの名門ジャヤディニングラット家出身の県長ヒルマン (HBS 卒) を捕まえた。後に釈放された彼はボゴールに逃げ、ボゴール理事州副理事官に就任した。ルバック県やパンデグララン県でもキヤイとサントリが立ち上がった。ルバック県の県長 R・ハルディウィナンゲン (R. Hardiwinangun) (OSVIA 1915年卒) は殺害され、キヤイが県長に就任した。パンデグララン県の県長 Mr・ジウムハナ・ウィリアアトマジャ (Mr. Djumhana Wiriaatmadja) (HBS 卒) はインドネシアの紅白旗の掲揚を拒否して逃亡し、ここでもキヤイが県長に就任した [ibid.: 63; Anderson 1972: 335-337]。

5. 民兵 (ラスカル) の台頭

キヤイや無法者が既存の自らのネットワークを利用して自立的な組織を作っていくことと並んで、各地ではプムダが中心となって民兵組織 (通称, ラスカル (lasykar)) が結成された。ラスカルはスカルニやハエルル・サレに近く、スカルノ、ハッタの共和国政府には必ずしも従わなかった。チレボン地区では、45年10月以降、ユスフ (Jusuf) 率いるインドネシア共産党が勢力を伸ばしていた。民兵組織ラスカル・メラを組織して、当地の共和国の軍警察と小競り合いを繰り返していた。46年2月には共和国軍をチレボン市から追い出して共和国の理事官、警察署長を逮捕した [Anderson 1972: 342-347]。

ジャカルタでは、9月中旬に上陸を開始した連合軍、蘭領東インド文民行政府に対して、ハエルル・サレなどがインドネシア青年世代 (Angkatan Pemuda Indonesia, API) というラスカルを結成して対抗した。その際、彼らは地方の首領とも接触を図り協力関係に入った。12月には英国軍の掃討作戦によりジャカルタは完全に制圧されたため、ラスカルはカラワンに移り、地方ボスらと共にジャカルタ解放を目指して戦った [Cribb 1991: 54-55, 57-83]。

6. 共和国政府とパンレ・プラジャの結束

こうしたラディカルな秩序変革、或いは連合軍への闘争姿勢に対して、共和国政府側はパンレ・プラジャを利用しつつ相手の組織化の程度に応じて硬軟両方の対応を取り、安定と秩序を達成しようとした。ジャカルタ理事州理事官セワカ (OSVIA 1915年卒) は、各地に台頭して権力を掌握した地方ボスを郡長、県長にするなどして懐柔を図った後、最終的には軍の力を借りるなどして彼らを鎮圧した。例えば、46年1月、副県長に R・アフヤド・ペナ (R. Achjad Pena)

（OSVIA 1922年卒）を据え、軍に治安を委ねることを条件に、共和国政府は「人民の父」ハエルのタンゲラン県長就任を認めたが、最終的に追放した〔Pemda Jabar 1993: 423-424〕。バンテン地方では、新たに理事官となったキヤイを牽制するために、共和国政府はユスフ・アディウィナタ（Jusup Adiwinata）（OSVIA 1920年卒）をバンテンの中心都市セランに拠点を置く西ジャワ州知事に据えた〔Williams 1985: 73〕。ラスカルについては、ブリアンガン地区では比較的速やかに鎮圧されるか、シリワンギ師団に編入され、影響力は弱まった。チレボンのラスカル・メラの蜂起も共和国軍により速やかに鎮圧された〔Anderson 1972: 267, 337〕。また、カラワン地区では貴族 R・ルバヤ・スルヤナタミハルジャ（R. Rubaja Surjanatamihardja）（OSVIA 卒）や R・ジュアルサ（R. Djuarsa）（OSVIA 1920年卒）がカラワン、ブルワカルタのブパティに就任した。

反社会革命という点で共和国中央政府と意見の一致を見たパンレ・プラジャも、オランダが本格的に西ジャワに進出を始めると、オランダによる安定と秩序達成の試みに参加するようになる。次にその動きを見たい。

IV オランダの侵攻とパスンダン国樹立

1. オランダ再来

日本軍降伏から約一カ月後、蘭領東インド文民行政政府代表ファン・デル・プラス（van der Plas）が連合軍と共にジャカルタのタンジュン・プリオク港に降り立った。「インドネシアにはオランダ資本が多く投資されており、オランダがインドネシアから手を引くことはあり得ない」〔Pramoedya *et al.* 1999: 69〕という彼の言葉にあるように、旧宗主国オランダは蘭領東インドを独立国として承認するつもりはなかった。オランダにとって、インドネシア共和国の中心人物、スカルノやハッタなどは日本ファシストへの同調者でしかなかった。ファン・モーク（van Mook）副総督を中心とするオランダ側の戦略は、オランダと連合関係にある連邦国家を旧蘭領東インドに建設するというものであった。オランダは自らの勢力がインドネシアにおいて脆弱であると認識していたが故に、蘭領東インドの再建ではなく、連邦制を実現しようとしたのである〔Yong 1982: 66-67〕。1947年3月にインドネシア共和国との間で締結されたリンガジャティ協定が、オランダ・インドネシア連合の結成とインドネシア連邦国家の形成を決めたのは、オランダのそうした意向に沿うものであったといえる。同協定において、オランダはインドネシア共和国がスマトラ及びジャワ島に対して事実上の主権を行使していることを承認し、共和国（ジャワ、スマトラ）、ボルネオ、大東地域（スラウェシ島などバリ以東の地域）の三つが連邦を構成する国家となることが決まった。その一方で、民主的手続きに則る限り、連邦構成国家内のある地域が構成国家となる道も残された。これは、西ジャワの地域住民が望めば連邦内

の構成国家形成も可能だということであった。オランダ側からすれば、住民が構成国家の形成を望むように仕向ければよかった。この協定が締結される以前に、既にジャカルタだけでなく、ボゴール、バンドンはオランダの手中にあった。オランダはパンレ・プラジャを味方に引き入れて、彼らに構成国家を形成させていくことになる。

2. カルタレガワによるパスンダン国樹立の試み

46年11月18日、パスンダン人民党 (Partai Rakjat Pasundan, PRP) が誕生した。その中心人物は事大主義者のメナックで元ガルット県長 RAA・モハマド・ムサ・スリア・カルタレガワ (RAA. Muhamad Musa Suria Kartalegawa) であった。彼は、スンダ人はまだなお封建制を好んでおり、またプリアンガンでは上からのイニシアティブなくして運動などあり得ないという時代錯誤的な確信を抱いていた [Officielé Vol. 7, 1978: 512-514]。

リングジャティ協定締結後の47年4月にはカルタレガワ自らが党首に就任し、5月にはバンドンでパスンダン国の樹立を宣言した。彼の構想は、パスンダン国の統治を行うのはスンダ人であり、統治の頂点である大統領には自分が就任し、新たなインドネシア国内法秩序が作られるまでオランダが全インドネシアの主権を持つことを認めるというものであった [Boer-van Meurs 1984: 34]。カルタレガワにとっても、オランダにとっても不満のない構想であった。

スンダ人メナックではバンドンのウィラナタクスマ家を含め、この建国宣言に賛意を表明するものはいなかった。一因は反オランダ意識であった。それと並んで、成り上がり貴族でしかないカルタレガワがいち早くオランダ支持を鮮明にすることでオランダの厚遇を受けることへの反発もあったようである。¹¹⁾ 彼を大統領とするパスンダン国が誕生すれば、他のメナックは軒並みその配下に置かれてしまう恐れがあったからである。オランダ側は当然の事ながらカルタレガワの行動に好意的ではあったが [Yong 1982: 104-108]、こうした事情から結局、彼の建国宣言を黙殺し、武力による西ジャワ地区の実効的支配を図ることになる。46年末には12月7日部隊がインドネシアに到着しており、オランダの兵力は10万人に達していた。その一部が西ジャワの実効的支配にあてられた [Cribb 1991: 161]。

3. オランダによるパンレ・プラジャの再登用

47年7月、オランダは(第一次)軍事行動を起こし、西・東ジャワの主要都市、スマトラのメダン、パレンバン周辺を支配下においた。他の地域と同様、西ジャワでも建国工作をすすめ

11) パスンダン国建国宣言を行う前にカルタレガワはアブドゥルカディル弁務官に次のように述べている。「プリアンガンのプパティ達は、間違いなくオランダ・インドネシア連合によって政策が遂行されることに懐疑的である。今や彼らはそうした連合で私がどのように遇されるか知っているからである。私は、私の(オランダへの)信頼と忠誠の犠牲になってしまった」(括弧内は筆者注) [Officielé Vol. 7, 1978: 513]。

た。建国にあたり、オランダはパンレ・プラジャを再び起用することを考えた。オランダにすれば、日本軍に協力した裏切り者 [Sutherland 1973b: 527] である彼らに代わって統治を担いうる者はいなかった。カラワン県長ルバヤやプルワカルタ県長ジュワルサは、オランダ軍が侵攻してきたとき、逃げずにオランダ側の県長に就任した [Cribb 1991: 161]。タンゲラン県長を辞めさせられたアグスを始め、共和国のボゴール県長、スカブミ市長、マジャレンカ県長などもオランダ側についた。バンテンから逃げてきたティルトスヤトナ前理事官もオランダ側についた。セランから逃げたヒルマンは西ジャワ地区行政問題担当弁務官 (Recomba) に着任した。この弁務官はファン・モークに直接責任を負い、軍部と協力して文民行政及び警察を統括する役割を担う要職であった [Boer-van Meurs 1984: 42]。バンドンでは、共和国支持に回ったウィラナタクスマ家のマレ (Male) (MOSVIA 1934年卒) がプリアンガン理事州警察署長を辞めて部下を連れて山間部に引きこもっていた。オランダによるバンドン県長就任要請に対し、マレは最初は拒否していたものの [BI, 2 December 1947]、最終的には応諾した。

共和国勢力が未だに根強かった西ジャワ東部方面でもオランダは貴族や行政官に近づいた。チアミスではブパティの息子 R・オットー・クスマスブラタ (R. Oto Kusumasubrata) に接触した [Boer-van Meurs 1984: 41]。¹²⁾ 彼は西ジャワ国家形成支持派に回った。一方、チレボン方面では、三つあるスルタン家の一つ、スルタン・カノマン (Sultan Kanoman) 家の指導により、スルタン・チレボン (Kesultanan Cirebon) の再建を目論むチレボン人民党 (Partai Rakjat Cirebon) が結成されていた。PRP 結党と時を同じくしていたことからしてオランダの後ろ盾があったことは間違いない。残り二つのチレボンのスルタン家 (Kesepuhan, Kecirebonan) は支持する様子がなく、チレボン人民党は立ち消えとなっていた [Officielé Vol. 11, 1983: 197]。¹³⁾ 続いて軍事侵攻後には、オランダはチレボン県長 R・マクムン・スマディプラジャ (R. Ma'mun Sumadipradja) (HBS 卒) と接触を図った。彼は後にできたパスンダン国ではプリアンガン理事州秘書、内相となる。

4. パスンダン国再樹立の試み

オランダはこのように西ジャワ各地の行政官トップや有力者の取り込みを図りつつ国家建設を企てた。そしてオランダの傀儡国家と呼ばれないように、言い換えれば、建前は民主的であることを示すために、西ジャワの代表とされた人物を集めて47年10月から48年3月にかけて三回の会議を開いて彼らの意見を聞いた [Tuhuteru n.d. 参照]。第三回会議 (2月23日～3月5日) がパスンダン国建国の上で最も重要であった。

12) ブール・ファン・ムールスはチアミスのブパティの息子を R・オットー・スブラタとしているが、文脈からすれば R・オットー・クスマスブラタである。

13) 第一回西ジャワ会議でスルタン・カノマンはチレボンを特別地域にしよう求めたが、それ以後目立った動きはない [Tuhuteru n.d.: 4]。

第三回会議出席者は、バンテンを除く西ジャワ各地から不正な選挙 [Kahin 1952: 241-243; Boer-van Meurs 1984: 49-51] で選ばれた者とジャヤディニングラット弁務官が任命した者との合計100名（インドネシア人78名）[*Parlemen* 1949; *Zakboek* 1949 参照] からなる。この会議においてパンレ・プラジャと並んで重要な役割を果たしたのは、パグユバン・パスンダン (Paguyuban Pasundan, 以下 PP) というスンダ人社会・教育・政治組織のメンバーである。

PP は、民族主義的組織の萌芽とされるブディ・ウトモがジャワ人中心的事業であることに嫌気がさした中級貴族出のスンダ人青年が1913年に作った組織である。オランダ時代にはオランダ同調派として人民評議会や西ジャワ各地の県議会で議席を占めていた。パスンダン国議会で PP が有力な勢力となったのは、スンダ人居住区を中心とするパスンダン国建国の上で、PP がオランダには格好の協力相手と映ったからであろう。

だが、第三回会議に参加した PP のメンバーの足並みは揃っていたわけではない。一方には RS・スラディルジャ (RS. Suradiredja) を中心として連邦制支持、つまりパスンダン国堅持派の国民党派があり、他方には R・アディル・プラディルジャ (R. Adil Puradiredja) を中心とする統一共和国支持のインドネシア会派があった。

当会議開催中、アディル達のようにパスンダン国を傀儡と見て建国に反対する者もいたが、オランダ人理事官モルシクは議長ジュワルサに逐次指示を与える議事運営をしてそうした反対を無視した [Boer-van Meurs 1984: 47-54]。議会外でも、統一共和国支持派、つまりパスンダン傀儡国家反対派の立場は48年1月のレンヴィル協定によって弱まっていた。オランダと共和国との間で締結されたこの協定により、共和国側は実質的にオランダの第一次警察行動とそれに伴う主要拠点占拠を認めた。従って、それまで展開していた共和国軍の精鋭シリワンギ師団も西ジャワからの撤退を余儀なくされたのである。西ジャワにはパスンダン国に強硬に反対する勢力はいなくなり、建国への大きな障害はなくなっていた。2月26日には、第三回会議はパスンダン国暫定議会となり、会議出席者は暫定議会議員となり、西ジャワ暫定政府の設置が決まった。

5. パスンダン国の誕生とパンレ・プラジャによる秩序再現の試み

パスンダン国暫定議会でスンダ語が公用語の一つとなり、国名はパスンダン国となった。国名がパスンダン国となったのは、ジャワの西部を意味するジャワ・バラット (Jawa Barat) ではなく、スンダ人の地であることを示すパスンダンを国名とすることを求める動議が全会一致で採択されたからである。48年3月4日、国主選挙が暫定議会において行われ、ウィラナタクスマがヒルマンを破って国主に出選され、4月下旬にはファン・モークも出席する中で国主就任式典が行われた。5月8日には、アディルを首班とする内閣が誕生した。ここにパスンダン国

14) 正確に言えば、1948年6月11日のオランダ東インド法1948年第115号により西ジャワ州が解消され、そ

が成立した。¹⁴⁾

かつて共和国の理事官、県長、市長であった者の大半はパスンダン国の要職に就いた。経済的魅力の乏しさもあって共和国領のまま残ったバンテン地区から逃げてきていた県長達もパスンダン国内で官職を得た。パスンダン国成立からパスンダン国の行政組織解体（50年3月13日）までに、少なくとも29名のインドネシア人が理事官、県・市長に就任した。¹⁵⁾ ラデンを冠する者が26名、マスを冠する者が2名であった（不明1名）。26名が確実に（M）OSVIAを卒業していた（89.7%）。これは、独立宣言後にラスカルや無法者が否定しようとし、そして共和国中央政府が維持しようとした旧パンレ・ブラジャ中心の秩序をオランダが再建したことを意味した。確かにバンドン県のマレ、スカブミ県のRAA・スリアダヌニングラット（RAA. Suriadanuningrat）（OSVIA卒）などの権威は住民に広く行き渡っており、正当性があればパスンダン国が存続してもおかしくなかった。¹⁶⁾

6. パスンダン国の崩壊

問題はこのパスンダン国の正当性であった。公用語にスンダ語を据え、国名をパスンダンとしたところで、建国経緯に明らかなように、このパスンダン国から傀儡という形容詞を拭い去ることは出来ず、その正当性の欠如を補いうるものではなかった。それ故に、49年12月のハーグ円卓協定を経てインドネシアが連邦共和国として独立し、パスンダン国がその連邦構成国として認められたにもかかわらず、パスンダン国解体の動きは止まらなかった。陸軍参謀長ナステイオンを中心とする陸軍はパスンダン国解体に動いていた。

国主は「インドネシア国軍がパスンダン国を解体に導くよう人民に圧力をかけている」[HI, 9 January 1950]と述べて国軍を非難していた。しかし、主権移譲に伴ってオランダ軍は撤収し始めており、シリワンギ師団が西ジャワの治安担当となっていた。さらにその頃にはジャワ人がシリワンギ師団のトップ、師団長、参謀長、副参謀などを占めており組織としてはパスンダン国支持に流れようもなかった[Sundhaussen 1982: 54]。

↘ の権限がパスンダン国に移り、更に同日の第116号法によりパスンダン国の統治権限が決まったときにパスンダン国が誕生した。

15) 同一人物が異なる期間に異なるポストに就いていた場合、一人とカウントする。地方行政官データについては、『パスンダン国広報』[BNP]、『ジャワにおける著名なインドネシア人』[Gunseikanbu 1944]、『パスンダン国議事録』[Parlemen 1949]、『西ジャワ行政史』[Pemda Jabar 1993]、『パスンダン国議会議員用ポケットブック』[Zakboek 1949; 1950]、『パスンダン国公報』[WRP]などに依拠した。

16) マレの場合、代々バンドン県を統治してきたウィラナタクスマ家の権威・権力であり、スリアダヌニングラットの場合、その個人的権威であった。オランダは人民の反発を恐れて、マレを強引にバンドン県長に就任させようとした[BI, 2 December 1947]。スリアダヌニングラットは、オランダもその影響力を無視できないだけでなく、共和国軍からも敬意を集めていた。ムフタル・アフアンディ（パスンダン国のスカブミ県公務員）の自伝[Muchtar Affandi 1997: 149]及びムフタル・アフアンディとのインタビュー、1998年9月10日。

パスンダン国の窮状打破のため、50年1月には恐らく国主も関与する形でパスンダン国をイスラーム国家に改変するクーデター事件が起きた。西ジャワ東部でイスラーム国家樹立のために勢力を拡大して共和国と武力対立を繰り返していたダルル・イスラーム、そして元王立植民地軍大尉のウェステルリング (Westerling) 率いる「ラトゥ・アディル軍」(Angkatan Perang Ratu Adil, APRA) が、パスンダン国閣僚と共謀したクーデターであった。その一環として APRA は、バンドン駐屯の王立植民地軍と王立軍の兵士も加えてバンドンを占領し、シリワンギ師団の兵士79人を殺害した。シリワンギ師団がすぐに抗戦の構えを見せると、オランダも APRA にバンドンからの撤退を求め、クーデターは未遂に終わった。¹⁷⁾ どこまでこのクーデターが計画性を持っていたのか定かではない。だが結果として、これまで以上に反パスンダン国感情を盛り上げ、各地で共和国への統合支持の声が挙がった。1月30日、ウィラナタクスマは声明の中で、「あらゆる支援を得て」パスンダン国解体を目論む集団の圧力に耐えきれず、国主を辞めると述べた [Sip, 30 January 1950]。50年3月にはパスンダン国は解体が決定し、西ジャワ州として共和国の一部になった。インドネシア統一共和国が誕生するより5カ月前のことであった。

V パスンダン国公職者の行方

統一共和国誕生後、このパスンダン国公職者はどうなったのであろうか。まずパスンダン国公職者が、パスンダン国存続中及び解体後どのような立場をとり、またどのように認識されていたのかを予め見てから、この問題に立ち入りたい。

1. パスンダン国公職者達とは

オランダの圧力なくして建国しえなかったパスンダン国の公職者を見てみると、共和国寄りと見られる人物もいた。そもそもウィラナタクスマも国主に選ばれたときには自分は共和国派であると公言しており、共和国派と見ることも可能であった。¹⁸⁾ 首相アディル、内相スマディプ ラジャ (元チレボン県長) や官房長官 Mr・コサシ・ブルワヌガラ (Mr. Kosasih Purwanegara) にしても共和国派と見なされている人物であった。また、オランダに捕まってパスンダン国官吏になった者もいた。更にレンヴィル協定以後、共和国の公務員が連邦構成国に勤務することを共和国副大統領ハッタは許可しており、生活苦などからパスンダン国の公務員となる者もいた。¹⁹⁾ 従って、国家は傀儡といえどもパスンダン国公職者が一概にオランダ同調者とはいえない

17) この西ジャワでのイスラーム国家樹立計画と後述するスルタン・ハミド二世のクーデター計画との両者にウェステルリングは関与していたが、この二つの計画の有機的連関については曖昧である [Persadja: 1955; Boer-van Meurs 1984: 90-92; Indonesia [1953]: 267-282; Tatang 1998: 107-112 参照]。

18) 上述のように、彼はパスンダン国存続のためにイスラーム国家樹立に動いた形跡があり、実質的には統一共和国支持派とは言い難かった。しかし、この動きは殆ど表沙汰にならずにすんだ。

19) 当時の州知事ウカルがハッタから直接承諾をもらったことである [Aat Suwangsa and Zaenal Abidin 1995: 137]。

かった。だが、パスンダン国官吏として給与を受け取って生活していたことは間違いなく、それだけでも共和国支持派として生活苦に陥っていた者には反発する十分な理由となった。「元パスンダン国公務員達はあの世に送られるべきだ」と言い放つ者までいた [Sip, 29 March 1950]。革命期の高揚が顕著に残る時代には、言説の上で物事に白黒をはっきりさせることが自らの権威・権力を高めることにつながる。だとすれば、共和国派がこうした発言をするのは当然といえる。しかし問題はそれがどこまで実現したかである。

2. オランダ同調者 (Co) の刻印

パスンダン国の共和国への編入が現実視されるようになった頃、パスンダン国に勤務したか否かで同調者 (Co) と非同調者 (Non) との区別が生まれ、前者は解職という不利益を被る可能性が出てきた。PP 系の新聞『シパタフナン』では連日この Non と Co の問題が取り上げられたし、タシクマラヤでは1月末の時点では既に126人の村長が辞職していた [Sip, 19 January 1950]。1950年第1号共和国政令でも、とりわけトップ・ポストについては Non を優先するよう求めていた [HI, 4 April 1950]。インドネシア共和国のパモン・プラジャ (Pamong Pradja) 組合 (SSPP) は、インドネシア連邦政府に手紙を送り、パスンダン国のパモン・プラジャは母国 (nusa dan bangsa) のために辞職することを求めていた [HI, 20 February 1950]。ちなみに、このパモン・プラジャとは領域の奉仕人を意味し、パンレ・プラジャに取って代わる共和国地方行政官の名称である。

こうした Non からの突き上げもあり、パスンダン国の高・中級官吏については一時、主として西カリマンタンへの異動が取り沙汰された。西カリマンタンでは軍政期に大半のパモン・プラジャが殺害され、人材の補填が必要であったからである。この異動を持ちかけたのはカリマンタンの都市ポンティアナックのスルタン・ハミド二世 (Sultan Hamid II) であった。彼はインドネシア連邦共和国国務大臣で強硬な連邦制支持派であった。2月20日にバンドンを訪れたスルタン・ハミド二世はジュアルサ議長に対し、カリマンタンの西にあるバンカ・リアウ理事州の調停官就任を奨めた [HI, 25 May 1950]。50年3月下旬にはパスンダン国の高・中級官吏の大半に当たる62名が西カリマンタンへの異動を希望した [HI, 20 March 1950]。彼らが如何ほどの危機感を抱いていたかが分かる。しかしこの話は実現しなかった。連邦共和国へのクーデター容疑でスルタン・ハミド二世が連邦検察庁長官の命令により逮捕されたからである。結局、県長・市長については一時、西ジャワ州知事付きとする処分が行われた。では彼らはその後どうなったのかを次に見ていきたい。

3. パスンダン国高官の行方

パスンダン国高官の行方を追跡してみると興味深いことが分かる。パスンダン国の県長・市

長ポストは全部で19あった。解体時期にそうしたポストに就いていたことが分かっている18名について見てみると、4名はそのまま同じポストにあり、西ジャワ内の他の県長・市長になったものが4名いた。昇進して副理事官、理事官になったものが2名おり、中央政府に異動した者が1名、外島に派遣されたものが1名いた。また、退職した県長の代わりにパスンダン国期の副県長が県長に昇進したケースも一つあった。²⁰⁾ 要するに確実に半数以上が、同調者とされながらも、現状維持、或いは昇進したことになる。但し、横滑りに他の県・市長になった県・市長がいたというのは、行政官が異動可能、取り替え可能な官吏的性格を強めたことを示すのかもしれない。同じ人物が留任し得たか否かについては地域差があった。プリアンガン理事州では継続性が高かった。例えば、解職話が持ち上がっていたバンドン県長のマレの場合 [Sip, 20 March 1950], 県内の郡長が村長、警察、パモン・ブラジャにマレの県長留任動議を提出するよう圧力をかけていた。住民の中には村長がそうした動議を出したことに反発した者もいたが、マレは留任に成功した [HI, 31 March 1950; 1 April 1950]。マレが留任すれば、その部下の郡長なども留任できたであろう。これはマレにとってもその部下にとっても好都合であった。一方、チレボン理事州の四県では、共和国の県長としてパスンダン国統治下にゲリラ的に存在していた元郡長などが正規の県長に就任した [HI, 25 April 1950]。

県長・市長以外の官職にあったものでいえば、既に高齢で心臓発作に襲われ左手足が麻痺していた国主は官職を退いた後、スンダ文化振興を図る団体で活動を続けた。パスンダン国議会議長兼カラワン理事州理事官ジュアルサは50年代に入ってからバンドン市議会議員やバンドン観光委員会副委員長などを務めた。パスンダン国首相付秘書であった R・トレスナ (R. Tresna) (OSVIA 1920年卒) は西ジャワ州地方議会・行政府官房長を50年代半ばまで務めた。また、パスンダン国議会内で連邦制支持会派をなしていた政党パルキ (元国民会派) はその後も政党として存続したし、党首のスラディルジャは後に私立パスンダン大学学長に就任した。同じく連邦制支持派として共和国支持派に買収工作をかけ、文相も務めた RU・ユダクスマ (RU. Judakusumah) は統一後、西ジャワ域内諸学校監督官に就任した。²¹⁾

4. パスンダン国公職者の生き残りを支えたもの

多くのものがこのように生き残った理由としては二つの要因が考えられる。①官僚としての能力、②血縁ネットワークの二つである。①の能力とは、地方行政運営のための実務能力のことである。行政の知識と経験を持った官吏の数は地方では限られていたであろう。独立を達成した結果、オランダ人や日本人が占めていた中央政府のポストにインドネシア人が座ることに

20) 残りの5名については、州知事付きとなって以後の行方は不明である。恐らく、州官庁で何らかの公職に残り続けたと思われる。

21) ユダクスマの買収工作については中央軍事情報部資料参照 [CMID 1948]。

なり、地方での人的資源にしわ寄せが及んだ。しかも、非同調者であった馬車の御者、市場監督官やホテルのボーイが分郡長になるということも起きていた [HI, 3 February 1950]。Non か Co の区別はイデオロギー的には、或いは個々人の感情の上では重要であったが、行政の運営を考えれば「適材適所」の保証もまた重要であった。西ジャワ州知事に就任したセワカ（Sewaka）（OSVIA 1915年卒）はこの問題に頭を悩ますこととなった。行政官としてチレボン県長（日本占領期）まで勤め上げた彼自身は、オランダによるパスンダン国首相就任の要請を拒否した共和国派であり、Non 寄りであった。但し、客観的基準（能力と適性）の重要性も十分認識していた [Sip, 29 March 1950]。上述のトレスナやパスンダン国スカブミ県副県長から県長に昇進した R・アブドゥルラジャク・ウィジャヤスリア（R. Abdulradjak Widjajasuria）（OSVIA 1925年卒）などは能力が認められた例であろう。

5. 血縁ネットワーク

②のネットワークとは、姻戚関係で構築された西ジャワの貴族ネットワークのことである。こうした西ジャワの貴族層がこぞってパスンダン国を支持したわけではなかった。例えば、独立宣言後に国軍に参加して将校になった者はそのままシリワンギ師団に残った。創設間もない国軍将校は青年が多く、彼らは名望家の家系であることが多かった。特にシリワンギ師団に入隊したスンダ人はそうであった。従って、父と息子、兄と弟という家族関係にあってパスンダン、共和国の二手に分かれ、それぞれで要職を占めることは珍しくなかった。いくつかの例を以下に挙げてみる。

パスンダン国建設に導いたジュアルサは息子がシリワンギ師団で大隊長を務めていた。チアミスのメナックである元共和国西ジャワ方面軍司令官 R・ディディ・カルタサスミタ（R. Didi Kartasasmita）は軍内対立で軍を離れた後パスンダン国に勤務した。その兄フセイン・カルタサスミタ（Husein Kartasasmita）は国民党員でありジャカルタの共和国政府代表であった。シリワンギ師団の大隊長アフマドはパスンダン国主の息子であり、バンドン県長の弟であった。パスンダン国厚生相は、チアミスのメナックである同師団のスカンダ・ブラタマンガラ（Sukanda Bratamenggala）の義理の父親であり、なおかつ小隊長オチェ・ジュンジュナン（Otje Djundjunan）の父親であった。タシックマラヤのメナックである同師団の R・ソリヒン・GP は兄のコサシがパスンダン国官房長官であったし、同じ一族の元タシックマラヤ県長 R・スナルヤ（R. Sunarja）もパスンダン国にいた。パスンダン国内相スマディプラジャの弟は同師団小隊長であった（1949年オランダ軍により殺害された）。メナックの血筋にあたる同師団大隊長セントット・イスカンドルディナタの父親は、初代共和国内閣で国务大臣の R・オットー・イスカンドルディナタ（R. Oto Iskandardinata）であり、父親の兄二人がそれぞれ文化相と国会議員としてパスンダン国にいた。同師団の大隊長 R・エディ・スカルディ（R. Eddie Sukardi）は父親

がパスンダン国国務相であった。同じく大隊長ナスヒ (Nasuhi) はチアミスのメナック、共和国西ジャワ州知事ウカル・ブラタクスマ (Ukar Bratakusuma) (弟)、パスンダン国主の助言者であったエマ・ブラタクスマ (Ema Bratakusuma) (兄) と親戚関係にあった。²²⁾

親子や兄弟以外の親戚関係のネットワークも重ね合わせるならば、共和国とパスンダン国をつなぐ貴族の血縁ネットワークの広がりが見えてくるであろう。²³⁾ こうした血縁関係の存在が、統一共和国誕生後、パスンダン国側についた者への非難を弱める作用を果たしたことは間違いない。最初のパスンダン国建国を宣言したカルタレガワは娘をアフマド・ウィラナタクスマに嫁がせた。この婚姻の直接的背景が何であれ、カルタレガワの体面が保たれたことは間違いなく、貴族としての連帯感を示す適例である。

また PP のネットワークもあった。上述のように PP はパスンダン国内にあって二派に大きく分かれていたが、更にもう一派が共和国の首都ジョグジャカルタに避難していた。それは、アディルの姉エマ (Ema) やジュアンダ (Djuanda) など共和国の首都ジョグジャカルタにいたメンバーであり、はっきりとパスンダン国解体を求め続けていた。こうした立場の違いが生じたのは、西ジャワの最善の発展を図るという戦略を同じくしながら、それを達成するための戦術が違ったからだだったと思われる。従って、統一共和国が与件となったとき、かつてのこうした立場の違いにもかかわらず、彼らの多くはパスンダンの後身であるパルキで共に政治活動を続けた。後の首相ジュアンダもパルキ党員であった。

VI 終 わ り に

以上のことをふまえると次のように述べるであろう。オランダ植民地時代、官吏養成学校を卒業してパンレ・プラジャとなりえたものは限られた貴族 (の子弟) であった。日本の降伏によって権力の中心がなくなると、パンレ・プラジャは社会革命の標的となった。パンレ・プラジャの中には管轄地域から逃亡したり、最悪の場合には殺害されたりしたものもいた。しかし、西ジャワの高官を全体として見渡せば、相当数が生き残った。何よりも共和国政府がパンレ・プラジャを必要とし、彼らの身分保障をしたからである。

その後、傀儡といわれるパスンダン国が西ジャワに建国されると、かつての高官でこの国家

22) パスンダン国に親族がいた場合、パスンダン国解体のおりに、セントットなどのように人事異動によりシリワンギ師団から他部隊に派遣された者もいた。しかし、国軍組織内の異動であり、その後に昇進は可能であった。

23) 例を挙げると共和国初代労働相イワ・ Kusuma Sumantri (Iwa Kusuma Sumantri) の弟 RG・スリア・スマントリ (RG. Suria Sumantri) はパスンダン国議会国民会派に所属していた。この兄弟は、ブラディルジャ兄弟姉妹 (アディル、クスナーパスンダン国側；エマ—共和国側) と親戚関係にあった。スリア・スマントリはブラタマンガラと共にジュンジュナン・スティアクスマ (Djundjunan Setiakusumah) (パスンダン国厚生相) の娘を嫁にしている。

岡本：革命期を生き抜いた植民地期原住民行政官吏（パンレ・ブラジャ）

の高級ポストに就いたものは多くいた。しかし、彼らを一括してエリートを構成する階層として捉えた場合にはもちろん、パスンダン国で要職に就いた個人のレベルで見ても、統一共和国誕生後にラディカルな形での地位後退は起きなかった。それは、植民地国家であれ、国民国家であれ、近代国家であれば不可避免的に要請される「実務処理」或いは「行政」の知識・経験において彼らが必要とされたからであり、共和国側にもパスンダン国のエリートと出自を同じくする仲間がおり、抽象的なレベルでは「パスンダン国 vs. 共和国」という対立関係は成り立ち得ても、具体的な局面ではそうした関係は成り立ち得なかったからでもあった。統一共和国に編入された後、パスンダン国を共和国化する一環として、共和国の首都であったジョグジャカルタから人材が送り込まれるということも一部では生じた。しかし彼らはジャワ人であったために「ジャワ vs. スンダ」というエスニックな対立が問題として浮上し、貴族官吏の継続性という点からは視線をそらすことにさえなった。

では統一国家が誕生し、政党政治が開花した50年代にパンレ・ブラジャはどうなったであろうか。システムとしてはあまり変わっていない。それは、「現在もインドネシア共和国によって採用されている行政制度は、（実際には植民地期の制度であり）今後も使われ続けるのであるならば、高官となるすべてのパモン・ブラジャは分郡長としての経験を先に積むべきである」[Sewaka 1955: 40] とセワカが述べていることからわかる。人員の面で見ても、西ジャワの州知事、理事官、県・市長に関する限り、半数以上は（M）OSVIA 卒の者であり続けたのである。こうした50年代の検討は次の課題としたい。

謝 辞

現地調査に当たっては、Bapak AB. Lopian, Bapak Edi Ekadjati, Ibu Nana など数多くのインドネシア人、特にスンダ人には数えきれずお世話になりました。本当にありがとうございました。また、本稿を書くに当たり、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の加藤剛教授、京都大学東南アジア研究センターの白石隆教授、非常勤研究員の左右田直規氏より草稿段階から貴重なコメントをいただきました。レフェリーの方からは懇切丁寧なコメントをいただきました。心より感謝いたします。本稿の内容は、東南アジア史学会中部例会（1999年2月、南山大学）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア研究センター共催『地域研究フォーラム：21世紀の地域研究』（1999年3月、京大会館）での発表と重なります。発表の機会を与えて下さった諸先生に感謝申し上げます。また、1997年度以降、資料収集などに当たっては日本学術振興会特別研究員科研費の一部を使わせていただきました。

引 用 文 献

- Aat Suwangsa; and Zaenal Abidin, Drs. 1995. *Ir. R. H. Ukur Bratakusumah: Dari Jaman Penjajahan Belanda hingga Jaman Pembangunan*. Bandung: Yayasan Kudjang.
- Anderson, Benedict R. O'G. 1972. *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance, 1944–1946*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- BNP (*Berita Negara Pasoendan*).

- Boer-van Meurs, Louise A. de. 1984. *De Totstandkoming en Het Functioneren van de Negara Pasoendan, 1947–1950: Collaboratie, Cooperatie en Verzet*. Ph. D. Dissertation, Universiteit Utrecht.
- Cribb, Robert. 1991. *Gangsters and Revolutionaries: The Jakarta People's Militia and the Indonesian Revolution 1945–1949*. North Sydney: Allen & Unwin.
- Djajadiningrat, Pangeran Aria Achmad. 1937. *Kenang-Kenangan Pangeran Aria Achmad Djajadiningrat*. n. p.: Balai Poestaka.
- Gedenboek MOSVIA 1879–1929*. [1929]. Bandoeng: N. V. Mij. Vorkink.
- Gunseikanbu. 1944. *Orang Indonesia Jang Terkemoea di Djawa*. Djakarta: Gunseikanbu.
- Indonesia, Kementerian Penerangan. [1953]. *Republik Indonesia: Propinsi Djawa Barat*.
- イワ・クスマ・スマントリ. 1975. 『インドネシア民族主義の源流——イワ・クスマ・スマントリ自伝』後藤乾一 (訳). 早稲田大学出版部.
- ジャワ軍政監部. 1989. 『治官報』(復刻版). 龍溪書舎.
- Kahin, A. R., ed. 1985. *Regional Dynamics of the Indonesian Revolution: Unity from Diversity*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Kahin, George McTurnan. 1952. *Nationalism and Revolution in Indonesia*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Koesoemasoebrata. [1929]. *Ti Ngongkoak Doegi ka Ngoengkoeuk*. In *Gedenboek MOSVIA 1879–1929*, pp. 100–108. Bandoeng: N.V. Mij. Vorkink.
- Kongres II KWS (Kongres II KWS 1987 Kumpulan Wargi Sukapura. Bandung: 5–6 Desember 1987)*. 1987. n. p.
- Lev, Daniel S. 1966. *The Transition to Guided Democracy: Indonesian Politics, 1957–1959*. Ithaca: Cornell Modern Indonesia Project.
- Moehamad Hasan. [1929]. *Sakola Menak*. In *Gedenboek MOSVIA 1879–1929*, pp. 142–148. Bandoeng: N. V. Mij. Vorkink.
- Muchtar Affandi, Prof. Drs. H. R. 1997. *Mulangkeun Panineungan*. n. p.
- Nina H. Lubis, Dr. 1998. *Kehidupan Kaum Menak: Priangan 1800–1942*. Bandung: Pusat Informasi Kebudayaan Sunda.
- Officiële (Officiële Bescheiden Betreffende de Nederlands-Indonesische Betrekkingen 1945–1950, 19 volumes)*. 1971–1994. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Parlemen (Parlemen Pasundan Satu Tahun April 1948–April 1949)*. 1949.
- Pemda Jabar (Pemerintah Propinsi Daerah Tingkat I Jawa Barat). 1993. *Sejarah Pemerintahan di Jawa Barat*. Bandung.
- Persadja, ed. 1955. *Proses Peristiwa Sultan Hamid II*. Djakarta: Penerbit Fasco Djakarta.
- Pramoedya et al. 1999. *Kronik Revolusi Indonesia: Jilid I (1945)*. Jakarta: Kepustakaan Populer Gramedia.
- Regeerings (Regeerings Almanak voor Nederlandsch-Indië)*. 1942. Batavia: Landsdrukkerij.
- Sewaka. 1955. *Tjorat-Tjaret dari Djaman ke Djaman*. Bandung: Visser.
- Sjahrir, Sutan. 1968. *Our Struggle*. Translated by Benedict R. O'G. Anderson. Ithaca: Cornell Modern Indonesia Project.
- Smail, John R. W. 1964. *Bandung in the Early Revolution, 1945–1946: A Study in the Social History of the Indonesian Revolution*. Ithaca: Cornell Modern Indonesia Project.
- Sundhaussen, Ulf. 1982. *The Road to Power: Indonesian Military Politics 1945–1967*. Selangor: Oxford University Press.
- Sutherland, Heather. 1973a. Notes on Java Regent's Families: Part I. *Indonesia* 16: 113–147.
- . 1973b. *Pangreh Pradja: Java's Indigenous Administrative Corps and Its Role in the Last Decades of Dutch Colonial Rule*. Ph. D. Dissertation, Yale University.
- Svensson, Thommy. 1980. *Peasants and Politics in Early Twentieth-Century West Java*. University of Gothenburg.
- Tatang Sumarsono, ed. 1998. *Mashudi: Memandu Sepanjang Masa*. Bandung: CV. Geger Sunten.
- Tuhuteru, J. M. A. n.d. *Riwajat Singkat Terdirinja Negara Pasoendan*. Djakarta: Djawatan Penerangan Pemerintah Djakarta.
- Walker, Millidge P. 1967. *Administration and Local Government in Indonesia*. Ph. D. Dissertation, University of California.
- Williams, Michael C. 1985. *Banten: Rice Debts Will Be Repaid with Rice, Blood Debts with Blood*. In

岡本：革命期を生き抜いた植民地期原住民行政官吏（パンレ・ブラジャ）

Regional Dynamics of the Indonesian Revolution: Unity from Diversity, edited by Audrey R. Kahin, pp. 55–81. Honolulu: University of Hawaii Press.

WRP (*Warta Resmi Pasoendan*).

Yong Mun Cheong. 1982. *H. J. van Mook and Indonesian Independence: A Study of His Role in Dutch-Indonesian Relations, 1945–1948*. The Hague: Martinus Nijhoff.

Zakboek (*Zakboek Parlemen Pasoendan 1948–1949*). 1949. Bandoeng: AID Druk.

Zakboek (*Zakboek Parlemen Pasoendan 1949–1950*). 1950. Bandoeng: Mascotte.

オランダ王立公文書館 (Algemeen Rijksarchief) 資料

CMID (Centrale Militaire Inlichtingendienst Buitenkantoor Bandoeng aan Directeur C.M.I. te Batavia, d. d. 23 October 1948 no/geheim/2097). 1948.

新 聞

BI (*Berita Indonesia*)

HI (*Harian Indonesia*)

Sip (*Sipatahoenan*)